

〈研究ノート〉

日本留学試験「日本語」の対策授業の実践報告

保志 茂寿<sup>1</sup> (日本学生支援機構 東京日本語教育センター)

A Practical Report on the Preparatory Lessons for the “Japanese as a Foreign Language” in the Examination for Japanese University Admission for International Students (EJU)

Hoshi, Shigetoshi

(Japan Student Services Organization, Tokyo Japanese Language Education Center)

キーワード：日本留学試験、日本語、語彙リスト

**Key words:** Examination for Japanese University Admission for International Students (EJU), Japanese as a Foreign Language, Vocabulary List

**要旨：**日本の高等教育機関への進学を希望する外国人留学生にとって、日本留学試験「日本語」は非常に重要な試験である。東京日本語教育センターでは、その対策授業として、過去に出題された問題が使用されることが多いが、学生の語彙が不足しているため、自力で解くのは困難に思われた。そこで、語彙リストを作成・配付し、予習を前提とした授業を行なった。ミニツツペーパーやアンケートを通して、学生の語彙リストの使用状況や使用後の感想、満足度を明らかにした。


**Abstract:** The “Japanese as a Foreign Language” in the EJU is a very important test subject for international students who wish to advance to higher educational institutions in Japan. Past examination questions are generally used in the preparatory lessons at Tokyo Japanese Language Education Center, but it appeared difficult for the students to answer the questions by themselves due to their inadequate vocabulary. In order to eliminate this problem, vocabulary lists were prepared and distributed to the students before lessons. This paper investigates how the students used the vocabulary lists, their opinions about them and the degree of satisfaction with the preparatory lessons through the analysis of ‘minute papers’ and a questionnaire.

原稿受理日 (2017-10-02)

査読後掲載決定日 (2017-11-06)

日本研究教育年報. 2018, Vol.22, pp129-134. ISSN 2433-8923

---

<sup>1</sup>  本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

## 1 動機・背景

日本の大学・大学院等の高等教育機関への進学を希望する外国人留学生にとって、日本留学試験は非常に重要な試験である。日本留学試験は、日本の大学等で必要とする日本語力及び基礎学力の評価を行なうことを目的に、2002年から国内外で年2回（6月及び11月）実施されている。実施者である日本学生支援機構<sup>2</sup>によると、2017年7月現在、留学生の入学選考に日本留学試験を利用している日本の4年制大学は58%で、国立大学に至っては96%にも上る。大学院においても、日本語能力試験の合否結果通知書の代わりに日本留学試験の成績通知書の提出を認めるところも少なくない。出題科目は、日本語のほか、数学に加え、理科（物理・化学・生物から2科目選択）、総合科目があり、学生は各大学が指定する受験科目を選択して受験することになるが、中でも最も受験者数が多いのは日本語である。

日本留学試験「日本語」は、日本の大学等での勉学に対応できる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）を測定する試験である。理解に関わる能力を問う領域（読解、聴解、聴読解）と、産出に関わる能力を問う領域（記述）からなる。2010年度よりシラバスが改定され、得点範囲は前者が0～400点、後者が0～50点となっている。

一般的に、日本語学校等における日本留学試験の対策授業として、過去に出題された問題が使用されることが多い。筆者の所属する東京日本語教育センター<sup>3</sup>においても、多くのクラスで過去問が使用されており、筆者が2016年4月から7月まで担当したクラスにおいても、同様に過去問を使用することにした。このクラスの学生は大学院等進学課程に在籍しており、前年の10月に入学してから、既に初級を終了し、中級前半レベルに達していた。国籍は、中国（6名）、台湾（3名）、タイ（1名）、サウジアラビア（1名）である。計11名の学生のうち7名が6月に実施される日本留学試験の受験を予定していた。受験予定のない4名は、日本語能力試験の合否結果通知書の提出による大学院出願を考えており、そのうち2名は既に日本語能力試験のN1に合格していた。

しかしながら、クラスのほとんどの学生にとっては、日本留学試験の過去問を自力で解くには明らかに語彙が不足していた。先行研究では、内容理解における語彙の重要性が指摘されている。三國他（2005）、小森他（2004）は、日本語学習者の語彙知識が日本語の内容理解に対して持つ説明力は、聴解で30%程度、読解で47%程度であると推定している。松下（2016）は、Koda（1989）、野口（2008）にも触れ、概ね読解力の半分が語彙力で説明されると述べている。日本語学習者が課題の内容理解に必要とする既知語（自立語）の割合（延べ）は、聴解で約93%、読解で約96%とされている（三國他 2005, 小森他 2004）。しかし、筆者が、担当したクラスの学生の既知語を東京日本語教育センターにおける初級語彙と仮定し調査したところ、2002～2009年度の日本留学試験の聴解問題に出現した自立語の

<sup>2</sup> [http://www.jasso.go.jp/ryugaku/study\\_j/eju/examinee/use/use\\_number.html](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/eju/examinee/use/use_number.html)（2017年9月9日参照）

<sup>3</sup> 日本の大学院・大学・高等専門学校等の高等教育機関に進学を希望する外国人留学生を対象とした予備教育を行なっている。前身は国際学友会日本語学校である。日本留学試験の作成・実施を担当する留学生事業部と同様、日本学生支援機構内の部署であるが、部署間で特別な情報の供与はないことを断っておく。

66.2% (延べ) しかカバーしていないことが分かった。ここで言う初級語彙とは、東京日本語教育センターで使用されている『進学する人のための日本語初級』(1994) 及び『進学する人のための日本語初級 漢字リスト』(1994) の A 欄<sup>4</sup>に出現する語彙を指す。そのカバー率が、聴解の内容理解に必要とされる約 93%に程遠いことから判断すると、明らかに語彙が不足しており、過去問の内容理解は困難に思われた。

4 月半ばの授業開始から 6 月半ばの日本留学試験受験までは 10 週間ほどで、対策授業に充てられる時間は 1 日 1 コマ (50 分) 程度であった。できるだけ多くの過去問を授業で扱うため、学生が解答するのに時間のかかる読解問題を週末の宿題にし、平日の授業で解説を行なうことにした。学生には、語彙不足を補うため、読めない漢字や分からない語を解説の授業までに調べてくるように指示した。また、聴読解問題に関しても、問題用紙に視覚情報があり、読めない漢字や分からない語を事前に調べて書き込んでおくことが可能であったため、祝日等の宿題にした。授業では、音声を流し、学生は書き込みのある問題用紙を見ながら解答した。しかしながら、聴解問題に関しては、視覚情報がないため、何らかの工夫をする必要があった。そこで、過去に日本留学試験に出題された聴解問題の語彙リストを作成し、事前に配付することにした。保志 (2016) では、大学の学部への進学を希望する学生を対象に、語彙リストを配付し、予習を前提とした授業を行なったが、学生からのフィードバックは得られていなかった。そこで、本稿では、ミニッツペーパーやアンケートを通して、学生の語彙リストの使用状況、使用後の感想、満足度を明らかにすることとした。

## 2 方法

### 2.1 語彙リストの作成・配付

まず、日本留学試験改定前 (2002~2009 年度) の聴解問題の過去問のスク립トを全てテキスト化した。次に、KH Coder<sup>5</sup>を使用し、各問題の自立語を抽出した。助詞・助動詞などの付属語は、語彙リストに掲載するには相応しくないと判断し、抽出しなかった。最後に、かぶとエディタ<sup>6</sup>を使用し、先に述べた東京日本語教育センターにおける初級語彙を除外した。以上の方法により作成した語彙リストの一部を例として示す。

<sup>4</sup> A 欄には「初めて日本語を学ぶ非漢字系の学習者を対象にしたもの」、B 欄には「A にプラスして学習するもので、漢字系の学習者や、ある程度日本語を学習した学生のためのもの」が提出されている。

<sup>5</sup> <http://khc.sourceforge.net/> (2017 年 9 月 9 日参照)

<sup>6</sup> <http://basil.is.konan-u.ac.jp/chuta/editor/> (2017 年 9 月 9 日参照)

平成 19 年度 日本留学試験（第 1 回）聴解

✓	言葉	読み方	意味
1 番			
	ゼミ		
	ミーティング		
	事務		
2 番			
	ジョギング		
	目標		

日本学生支援機構（2007）より作成

以上のように各年度の実施回ごとに作成した語彙リストを学生に配付し、漢字の読み方や語の意味を事前には書き込んでくるように指示した。授業では、音声を流し、解答・解説を行った。

## 2.2 ミニツツペーパー

各語彙リストの使用後に、語彙リスト使用に関する感想を自由に記述してもらった。

## 2.3 アンケート

日本留学試験対策授業が全て終了した後で、アンケートを行なった。無記名で次の 3 つの質問に答えてもらった。

Q1：授業について（1. 非常に役に立った 2. 役に立った 3. 普通 4. あまり役に立たなかった 5. 全く役に立たなかった）

Q2：授業の前に語彙リストを配ったことについて（1. 非常に役に立った 2. 役に立った 3. 普通 4. あまり役に立たなかった 5. 全く役に立たなかった）

Q3：語彙リストをどのように使ったか。

Q1、2 は選択式回答で、Q3 は記述式回答である。また、それぞれの質問の横に、意見・感想を書く欄を設けた。

### 3 結果・考察

まず、アンケートの結果であるが、Q1 の授業については、「非常に役に立った」(7 名)、「役に立った」(3 名)、「あまり役に立たなかった」(1 名) で、概ね肯定的な評価が得られた。「あまり役に立たなかった」を選択した 1 名に関しては、その横の意見・感想欄に何も書いていなかったため、その理由は分からないが、恐らく日本留学試験を受験する必要のなかった学生の一人ではないかと予想される。

次に、Q2 の授業の前に語彙リストを配ったことについてであるが、「非常に役に立った」(8 名)、「役に立った」(2 名)、「普通」(1 名) で、Q1 の授業そのものに関する評価よりは全体的に肯定的な評価となっている。「普通」を選択した学生は Q1 で「あまり役に立たなかった」を選択した学生と同一人物であるが、語彙リストの配付に関しては否定的ではなかったことが窺える。

Q3 の語彙リストの用途であるが、11 名全員が「予習するために使った」と回答し、更に 3 名が「言葉を覚えるために使った」と記している。一部の学生が語彙リストを再活用していることが分かった。

では、対策授業期間中に行なわれたミニツペーパーはどうであったか。語彙リストを使用することに関して、「あらかじめ言葉の意味を調べておいたほうが聴きやすい」、「内容が理解しやすくなった」、「前回より聴解と語彙の能力が向上した」、「正解率が高くなって嬉しい」など、肯定的な感想もあったが、「試験のとき、リストがないと正解率も低くなる」のではないかと心配する学生もいた。また、「①授業のときに聴く→②意味を考える→③分からない単語を調べる→④もう一度、聴く」という方法でやりたいという率直な意見もあった。更に、語彙リストそのものに関しては、「時間を省くことができる」という感想を持つ漢字圏の学生がいた一方で、「読み方がなかったので翻訳するとき、結構時間がかかった」という非漢字圏の学生もいた。同じ非漢字圏の学生は、「分からない言葉を翻訳するとき、いろんな意味が出てきた。文がないので、どれがよく使う意味か分からなかった」と書いていた。語彙リストなしで試験の本番に近い形式で過去問を解きたいという学生や、事前の意味調べを負担に感じている学生がいることも分かった。

これらの学生の感想や負担を考慮し、語彙リストの配付は、3 回分(2007 年～2009 年度の第 1 回)、計 60 題に留め、その後は語彙リストを配付せずに、日本留学試験改定後の問題を直接解く形式に変更した。語彙リストに頼らない演習を必要とする時期になったと判断したからである。最終的に、語彙リストを配付した聴解の授業は、6 コマ程度になった。

### 4 まとめと今後の課題

大学院進学を目指す留学生を対象に、約 10 週にわたり、日本留学試験の対策授業を行なった。過去問を解く際の学生の語彙不足を補うため、視覚情報のない聴解問題については語彙リストを配付し、全ての対策授業終了後にアンケートを行なったところ、概ね肯定的な評価が得られた。

各語彙リスト使用後に行なわれたミニッツペーパーでは、学生の率直な思いを知ることができた。語彙リストに関しては、漢字の読み方が書いていないと意味調べに時間がかかってしまう学生がいることや、文脈がないと意味調べをしても適切な意味の選択ができない場合があることが分かった。また、試験本番に近い形式で過去問にチャレンジしたいと考える学生がいることも分かった。

今後はこれらの意見も踏まえ、対策授業を改善していきたいと考えている。具体的には、今回作成した語彙リストのデータを利用し、日本留学試験の過去問の中で学生が既知語の多い問題から順に解けるように問題の並べ替えを行ないたい。それにより、学生は試験の本番に近い形式で、未知語が少ない問題から順に、自力で解くことが可能となり、より効率的に学習が進められるようになると考えられる。今回作成した語彙リストは、問題を並べ替える際のデータとして利用する以外にも、学生に復習用として配付することも可能であると思われる。

## 参考文献

- Koda, K. (1989) The effects of transferred vocabulary knowledge on the development of L2 reading proficiency. *Foreign Language Annals*, 22 (6), pp.529-540.
- 小森和子・三國純子・近藤安月子 (2004) 「文章理解を促進する語彙知識の量的側面—既知語率の閾値探索の試み—」『日本語教育』120, pp.83-92.
- 日本学生支援機構 (2007) 『平成 19 年度 日本留学試験 (第 1 回) 試験問題』桐原書店
- 日本学生支援機構東京日本語教育センター (1994) 『進学する人のための日本語初級』独立行政法人日本学生支援機構
- 日本学生支援機構東京日本語教育センター (1994) 『進学する人のための日本語初級 漢字リスト』独立行政法人日本学生支援機構
- 野口裕之 (2008) 「試験結果の分析」国際交流基金・日本国際教育支援協会 (編) 『平成 17 年度日本語能力試験 分析評価に関する報告書』 pp.45-111. 凡人社
- 保志茂寿 (2016) 「日本留学試験『日本語』の対策授業—出現語の予習を前提に—」『日本語教育センター紀要』12, pp.50-54.
- 松下達彦 (2016) 「コーパス出現頻度から見た語彙シラバス」森篤嗣 (編) 『ニーズを踏まえた語彙シラバス』 pp.53-77. くろしお出版
- 三國純子・小森和子・近藤安月子 (2005) 「聴解における語彙知識の量的側面が内容理解に及ぼす影響」『日本語教育』125, pp.76-85.